

旅行記

続台湾紀行「弔魂碑」

阿部靖夫（会員）

秘められた「弔魂碑」の謎を解き明かすべく、今回の台湾旅行は弔魂碑建立者大津麟平の孫大津紀夫氏と同行になった。大津麟平の歴史をネット上で調べているうちにヒットしてきたのが『大津麟平伝』大津紀夫著作本であった。国会図書館に著作者本人が寄贈されているというネット情報を見て霞ヶ関まで足を運び、目的物にめぐり会う。次なるは、大津紀夫氏本人探しと相成った。またもやネット検索にお世話になり大津紀夫氏の住所電話番号を偶然にも捜し当ててしまった。それから半年経て台湾台中谷関への同行となったのだ。

山口県宇部市お住まいの大津氏は、実家の京都等持院町に泊まり関空から桃園空港へ、自分は羽田から松山空港へ、ほぼ同時

間の便を選択。そして台北駅高速鉄道当日券売場を集合場所とし合流を目指した。が、これが大間違い、集合予定時間になってもお互い居場所が確認できず途方にくれてしまった。前もってスマホのLine登録し、自我映像のやり取りやLine電話で話したりして準備はしていたが、お互い初顔合わせ、台北駅地階の雑踏と薄暗い雰囲気はどうにもならない状況に陥ってしまった。しばらく経ってWi-Fi電波状態が

良くなり通話ができるようになり、居場所が分かり一階の大広場での初対面となった。台北駅大広場正面上部には「岩手」の大看板が印象的であった。

待ち合わせ予定一時間遅れで台湾新幹線の乗客となる。台中駅まで1時間の乗車、午後4時

前に到着。今回お世話になる劉氏息子熊さんが自家用車で迎えに来てくれていた。目的地谷関大飯店まで約2時間の道のりである。

前回2017年5月谷関を訪ねた時もそうであったが今回も天気恵まれ快晴。1週間前から雨模様の中、春節を3日後に控えて自家栽培の桶柑収穫も一段落したようだ。我等訪台初日からピーカンの天気となる。

台中谷関2日目、いよいよ今日は弔魂碑を目前で見られる日である。ホテルから大甲溪に架かる吊橋を渡り、一般道からダラダラ坂をのぼり踊り場で一時休憩。いよいよ急斜面になる。

弔魂碑に行く歩道はなく、道路柵で閉ざされている。柵を乗り越えて行くのだ。熊さんの先導で、左肩上がり傾斜面の岩と温泉湯を通すパイプに沿って登って行くと、突然道幅30cmのコンクリート通路になる。右側は断崖絶壁の大甲溪、50m下は急流。幸いかな一番危険な部分は長さ



20 mくらいの命綱が張ってあるで、綱を頼りに進む。大津氏は自分より5歳年長なのに、もくもくと後に付いて来ている。登り始めて10分くらい経ったであろうか、大きい岩が目前に現れその向こう側に真っ白に光る石碑が見えてきた。やっと辿り着いたのだ！立ち止まりよく見ると弔魂碑が真白に輝いている。7段の階段の最上部に鎮座している。ゆっくりと近づきながら見渡す。

今まで適わなかった弔魂碑本体が現れたのだ！真っ白にまぶしく光輝いているようであった。登り始めからスマホビデオを回し続けていたので、石碑本体の正面には「弔魂碑 麟平書」の文字が切り込まれ、右側から裏側に回り撮影を続ける。裏側には文字が不鮮明ながら「明治四十四年二月二十五日 殉難 故台中庁警部 原猪治 故台中庁隘勇 廖 故台中庁隘勇 ヤボノナシ 昭和八年二月二十五日有志建立」、はっきりと確認。前回訪台中谷関途中引き返しの無念を、この日晴らすことができた。

大津紀夫氏は祖父大津麟平の台湾総督府理蕃総長当時の写真を持参し弔魂碑前に置き、遠い昔に亡くなった（昭和13年他界）祖父を供養したのだが「大津麟平伝」執筆前にこの弔魂碑建立の情報があれば、台湾時代のもっと豊かな麟平像を膨らませられたらう。

旅行前に大津紀夫氏から送付いただいた麟平日記のコピーにも、明治四十四年二月二十五日ページ最後に事件の記載がされていたが、残念ながら日記は昭和6年の記述で終わっていて、弔魂碑を建立した有志名や経緯については不明になっている。どうしても事件後24年も経過した昭和8年にこの弔魂碑を自ら建立したの理由は分からないままである。

翌朝一人で昨日の道を散歩する。大甲溪の吊橋を渡り、古霊寺にお参りし、弔魂碑の下に差し掛かる崖の上を見上げながら行くと、壁が鉄骨の足組みとブルーシートで囲われている。昨日は気づかなかったのだが、壁

面高さ15 m幅20 mくらいの壁に彫刻が施されたものが作られている。はたしてこれは何を意味している工事であろうか。もしや85年前に建立された弔魂碑を賛美する壁画であって欲しいが、古霊寺は弔魂碑と一体化された古刹です。明治31年日本人山田三郎創建と案内板にある。明治四十四年二月二十五日に北勢蕃との戦いで亡くなった三人の犠牲者を、昭和八年二月二十五日に弔魂碑建立と同時期に、大津麟平が資金を提供し大幅な改装したのではないかと思われる。



現在、弔魂碑と古霊寺は管理組合で一体管理されている様子。また昭和八年（1933年）は、明治四十二年（1909年）から始まった台湾総督府五箇年理蕃計画から24年目、ブヌン族が原住民として最後に帰順した年でもある。ここ谷関温泉は日本時代に発見され明治温泉と称された。警察関係者の保養所が作られていたためか、歓楽街もなく質素な温泉街として続いている。弔魂碑だけが何故こんな岩場の雑木林に囲まれた場所にひっそりと鎮座しているのであるのか？ 何のための弔魂碑なのだろう？

というのはここ台中和平区タイアル族原住民の眼中では、霧社事件（昭和5年10月27日）発生1年前、当地タイアル族の部落に、モナ・ルタウが率いる一族が侵入し老若男女が26名惨殺された事件があった。「モナ・ルタウは英雄ではない。当時われわれの部落は彼によって滅ぼされるところだった。本当に憎らしい」南投のモナ・ルタウ所屬のセディック族との闘争の歴

史があった土地である。そして昭和八年（1933年）ブヌン族の帰順と当時の大津麟平はご存知の事件であったであろうと推測する。

夕食時Facebookを開くと、

突然ビッグニュースがスマホに飛び込んできた。それは大津さんとホテルにて二人で夕食を終わらせた時であった。ニュースの出所は、熊さんの投稿したFacebookのコメント欄に、熊さんの友人からだ。この弔魂碑は古物として国家文化資産で既に登録され公開資料として発表されているという情報である。

<https://nehdb.boch.gov.tw/assets/overview/antiquity/2013080100004>

しばらく疑ってかかっていたのだが、これは本当なのか？公開資料を良く見てみると、類別…古物、級別…一般古物、種類…図書文献及影音資料となつて写真も添付されている。

1、弔魂碑建造昭和8年（1933年）。明治44年（1911

1年）発生した北勢蕃との戦いで日籍警部及び隘勇の殉職。

2、日治時期理蕃政策中部山区族との衝突。

3、碑文には日本人と原住民の名前が列挙されているなど歴史文物として貴重である。

広告日2013年8月1日

保存管理は台中政府、古霊寺管理委員会。

写真も添付されており、5年前登録時の弔魂碑と現在の姿を見比べてみると、昼間見た弔魂碑と階段3段目までが真白に化粧されていて、異常なまでの白さに驚いたばかりなのに！

今まで探し続けていた弔魂碑が、古物文化財になっていたのなら掲示して表示して欲しいものであるが、処々の問題があったのかもしれない。今朝方散歩時にみた壁面の工事が、どんな形で現れるか注意しておく必要がありそうだ。

今回の弔魂碑についての下調べは、国会図書館、日本台湾交流協会図書室、台湾文化センター、

台湾協会等を訪問し資料を集めた。

まず国会図書館では「大津麟平伝」大津紀夫著、これには理蕃策原議の全文が大津紀夫氏の訳文入りで、写真や解説文とともに書かれている。

日本台湾交流協会図書室ではマイクロフィルムから原猪治（長野県）が台中庁東勢角支庁警部補勤務中殉職し月俸が三十五円に昇給し一時金二百円支給され、大正2年10月には「生蕃及土匪討伐従事した69人とともに靖国神社に合祀されている。

台湾文化センターでは古霊寺と弔魂碑。歴史が一体化していて明治四十四年二月二十五日と昭和八年二月二十五日が連続してキーワード的に現れてくる。

最後に台湾協会である。1895年から1945年まで50年間の台湾総督府職員録が保管されている。蕃務業務日記のページを見ると大津蕃務総長が部下とともに台中南投蕃界視察。明治44年2月19日から3月6

日までの行動がぎっしりと書かれている。原住民から銃器を回収しながら台中谷関に2月25日に来たのであろうか。午後7時に突然の電話報告「隊ノ最前線ニ在リタル第一部隊ニ敵蕃襲来シ部隊長原警部重傷巡査補一、蕃丁一戦死ス」。そのため26、27日と滞在することになったようだ。後に原猪治警部補は死亡に至る。日本人観光客がほとんど来ない台中谷関温泉で、日本時代理蕃政策中の一事件の記録が、85年間こんな形で台湾政府の古物としてこっそり残っている。

（2018年5月11日）

